

アメリカ詩の2つのモダニズム ——ウィリアムズがみたパウンドの詩学

原 成 吉

序

ウィリアム・カーロス・ウィリアムズがエズラ・パウンドにペンシルベニア大学で出会ったとき、ウィリアムズは19歳の医学部生、パウンドは17歳のロマンス語を専攻する学生だった。ウィリアムズはパウンドとの出会いを「紀元前(B.C.)と紀元後(A.D.)くらいの違いだ」(Heal 5)と回想している。このウィリアムズとパウンドの出会いが、20世紀アメリカ詩の始まりといっても過言ではないだろう。20世紀の前半がT.S. エリオットの詩学が支配した時代だったとすれば、後半はドナルド・アレンの編纂したアンソロジー『新しいアメリカ詩』(*The New American Poetry*, 1960)に象徴されるように、ウィリアムズとパウンドの影響から出発した詩人たちの時代であった。

『パウンドとウィリアムズの手紙集』(*Pound / Williams: Selected Letters of Ezra Pound and William Carlos Williams*, 1996)の編者によれば、現存する二人の手紙は535通になるという。この書簡集は、二人の詩人の交流の記録であると同時に、そこからはモダニズム美学の二つの典型がみてとれる。さらに興味深いことは、この二人の詩人が互いに相手の手紙を自分のエッセイや詩作品のなかで引用していることだ。最初はパウンドが1917年10月の*The Little Review*にウィリアムズの手紙を引用(ただしWCWがEPに送った初期の手紙は失われている)し、ウィリアムズは『地獄のコーラ』(*Kora in Hell: Improvisations*, 1920)の序文にパウンドの手紙を使っている(SL 5)。

この小論では、ウィリアムズとパウンドの間で交わされた書簡を手がかりにしながら、二人の詩学の違いに注目し、ウィリアムズが『パターソン』(*Pater-*

son, 1992) で探し求めた女性性の詩学から、パウンドが『詩篇』(*The Cantos*, 1995) で展開した父権性の詩学を検討する。そこからアメリカ詩における 2 つのモダニズムの特徴を明らかにしたい。

1

1996 年にパウンドの研究家ヒュー・ワイトマイヤーがウィリアムズとパウンドの手紙を編纂し、丁寧な注をつけて一冊の本にまとめた。二人が最初に出会ったのは 1902 年の秋、いまからおよそ 100 年前、場所はペンシルベニア大学、パウンド 17 才、ウィリアムズ 19 才の時であった。二人の交友関係は、ウィリアムズがこの世を去る 1963 年まで、主に手紙をとおして続いた。パウンドは、ウィリアムズが亡くなったとき彼の妻フロスに「ビルは俺のことを 60 年辛抱してくれた。彼のような詩人の友人は二人といない」(*SE* 319) と電報を送った。その間二人の間には新しい詩の創造をめぐってさまざまな議論があった。

1918 年の具体例を見てみよう。エドガー・ジェプソンという英国の批評家が、「最近のアメリカ合衆国の詩」“Recent United States Poetry” というタイトルで、シカゴの *Poetry* とその編集者ハリエット・モンロー批判を *The English Review* (May, 1918) に発表した。それがパウンドの紹介文付きで「西部派」(*The Western School*) というタイトルで 1918 年の「リトル・レビュー」9 月号に再録された。内容を簡単に紹介しておこう。「ポエトリー」誌、およびハリエット・モンローは、ヴェイチェル・リンゼイ、エドガー・リー・マスターズ、ロバート・フロストなどのこれ見よがしの文体や出来損ないの作品に賞をあたえるのはけしからん。最近のアメリカ詩の最良の作品は T・S・エリオットによるものであり、とりわけ「J・アルフレッド・ブルーフロックの恋歌」“The Love Song of J. Alfred Prufrock” (*CP* 13-17), それに「なげく少女」“La Figlia Che Piange” (*CP* 36) が賞に値する作品である、とジェプソンは述べている (*SL* 5)。おそらくパウンドの考えもジェプソンと同様だったといつてよい。

これに対して、ウィリアムズはいわば挑戦状を 1919 年の「リトル・レビュー」4 月号に載せ、それを 1920 年に出版した『地獄のコーラ』のプロローグに使っている。¹⁾ その中でウィリアムズは、パウンド、エリオット、H・D・

などの国外在住の詩人たちが、根なし草のコスモポリタンで、あまりにヨーロッパの文学伝統に拠りすぎていて、とてもアメリカ詩を代表しているとは考えられないとし、このエッセイのなかでパウンドについて、「E. P. はアメリカ詩における最大の敵である」(“E. P. is the best enemy United States verse has.”) といっている (SE 24)。

しかしウィリアムズは、シカゴ派の詩人たちを支持したわけではない。「プロローグ」で称賛したのは、ウィリアムズが属していたニューヨークのアルフレッド・ステイグリッツのところに集まったアヴァンギャルドたちだった。マリアン・ムア、ウォレス・ステイヴンズ、ミナ・ロイ、アルフレッド・クレイムボーク、マックスウェル・ボーデンハイムといった文芸誌 *Others* に関係の深かった詩人たちである。

『地獄のコーラ』の「プロローグ」で興味深いことは、当時のアメリカ詩の動向についてよりも、ウィリアムズがパウンドからのプライベートな手紙を、自分の作品のなかに引用していることだ。²⁾ その手紙でパウンドは、ウィリアムズがアメリカで生まれた第一世代であることを揶揄しながら、自分のコスモポリタニズムを弁護している。

え、アメリカだって？ おまえみたいな度し難い外国人がその土地の何を知っているっていうんだ。おまえの親父はアメリカの端っこに入り込んだに過ぎない。それにおまえはアッパー・ダービーやその先のマウンチャンクの山道より西へは行ったことがないだろう。

下着のなかに大平原(プレーリー)の風の渦巻きを感じているハリエット・モンローや男盛りのサンドバークが、おまえみたいな東部の軟弱男を本物のアメリカ人だと認めるとでも思っているのか。信じられないね。

オシッコちびりそうな大平原の珍しい光景を肌で感じたことはないだろう。シエラネヴァダの突き出たり隆起したりした山をおまえは見たことがないときてる。そんなやつにアメリカという国の何がわかるっていうんだ。

おまえにはアイルランドの片田舎(カウンティ・クレアー)からやってきた純真で騙されやすい移民の血が流れている。しかしおれの(偉大なオレの)血には、その大地のヴィールスや病原菌がほとんど3世紀の長さにわたって住みついている。

(度し難いスノップ。やつに石をぶっつけてやれ!!!)³⁾

それから少し飛んで、フランス語で書かれた部分、これはワイトマイヤーの指摘によれば、パウンドはレミー・ド・グールモンの *Epilogues* から引用しているという (SL 34)。

もし、文学におけるコスモポリタニズムが普及して、人種間の違いによって生じた血なまぐさい憎しみに終止符を打つことができたなら、それは文明と人類のすべてにとつての勝利だといえるだろう。

行き過ぎた排他的な愛国心からは、その当然の結果として外国に対する恐怖心が生まれる。そうになると、愛国心の言いなりから逃れて、他の人々の暮らしぶりを見にゆき、その人びとの闘争に加わり、労働を分かち合うということに対する恐怖心だけではすまされない。自分の国にとどまるだけでなく、ついには自分の国の扉を閉ざすことになるのだ。⁴⁾

このようにウィリアムズは、自分を攻撃する手紙を作品のなかに引用することで、自分とは相容れない他者の声によって現実を提示する手法を、後の『バターソン』でも使っている。しかしパウンドは、自分を糾弾する手紙を作品に引用することはなかった。

ウィリアムズとパウンドは、1920年代になってもアメリカの詩人の役割について手紙で議論を戦わせている。ウィリアムズは1923年に散文と詩をコラージュした詩集『春のいろいろ』(*Spring and All*)を出版し、25年には「アメリカ、およびアメリカ人とは何か」という彼の生涯のテーマを中心にすえた、ウィリアムズのマニフェストとでもいべき散文作品『アメリカ人気質』(*In the American Grain*)を出版している。ヨーロッパ中心のモダニズムの時代にウィリアムズは、この二つの作品によってアメリカの作家がすべきことは、アメリカ文学をヨーロッパ文学の伝統に結びつけるのではなく、アメリカ的経験のなかから、アメリカ固有の新しいものを発見し、それをアメリカ語(“American Language”)によって表現すべきだと主張した。

この時代の興味深いエピソードが二人の書簡集にある。パウンドはパリからウィリアムズに宛てた1922年3月18日の手紙で、“Bel Esprit”(Fine Spirit)という計画(SL 53-4)について語り、ウィリアムズに資金の協力を求めている。「ベル・エスプリ、素晴らしい精神」とは経済的に困っている才能ある芸術家に1年間、生活費のことを気にせず、自由に創作活動に専念できるよう資金援助をしようという、いわば「めぐまれぬ芸術家救済基金」といったもので、

いかにもモダニズムの興行師パウンドらしいアイディアだ。そして資金も集まらないうちから、パウンドは最初に救済すべき芸術家として T・S・エリオットの名前をあげている。おそらくウィリアムズはエリオットという名前を見て内心穏やかではなかったはずだ。ウィリアムズはこの年の11月に *The Dial* に発表されたエリオットの「荒地」“The Waste Land” (CP 61-86) を読んで、「これはわたしたち[アメリカ]の文学にとっての大きなカタストロフィーだ」(AUTO 146) とのちに自伝のなかで嘆いているが、パウンドに25ドル送っている。もっともパウンドの要求は50ドルだったが…残念ながらこのプランは頓挫した。とはいえパウンドは、1928年の11月に出た「ダイアル」誌に「ドクター・ウィリアムズの立場」(LE 389-98) というウィリアムズを称賛するエッセイを書いている。それに対してウィリアムズも「ダイアル誌に載った君がぼくの作品について書いてくれた批評、あれは最高だね。だれもあれ以上のものは書けないだろう」と1928年11月6日付けの手紙(SL 95)で感謝の気持ちを素直に伝えている。

2

またこの時期、往復書簡の区分でいえば1921-32年に、この二人の詩人はアメリカの歴史を作品のなかに取り込んでいる。一つは先ほど少し触れたウィリアムズの『アメリカ人氣質』、もうひとつはパウンドの「詩篇31-34」、いわゆる「アダムズ・キャントーズ」と呼ばれている詩篇だ。このなかでパウンドはトマス・ジェファーソンとジョン・クインジー・アダムズの手紙を自分のテキストに織り込んでいる。手紙を長篇詩のなかでコラージュしてゆく方法は、ウィリアムズも後に『パターソン』で行っているが、これについてはあとで詳しく述べることにする。

1929年に始まる大恐慌によって、ウィリアムズとパウンドは政治的、経済的行動にかかわらざるを得ないような歴史的必然性を感じるようになる。パウンドがソーシャル・クレジット(社会信用説)を信奉し、C・D・ダグラスの理論に彼独自の貨幣理論などを加え、その伝搬に務めたことはよく知られているが、ウィリアムズも1933年にニューヨークでソーシャル・クレジット⁵⁾の集會に出席するようになり、長篇詩「パターソン」の第4巻のセクション2でクレジット論を展開している。

しかし政治的な立場は正反対の方向へ分かれいった。ウィリアムズは、プロレタリア階級を描いた小説や詩を左翼系の文芸誌に発表し、ドイツのナチズムやイタリアのファシズムを嫌悪し、当時のソビエト連邦の労働者、農民、兵士の闘争のシンパとなる。それとは対照的にパウンドは、右翼に傾倒してゆき、ムッソリーニを崇拜し、イタリア・ファシズムのサンディカリズム(労働者による生産・分配手段の所有を目指す組合主義)が、ソーシャル・クレジットの原理を実行に移し、経済的公正さを実現するための経済システムであると信じるようになる。1937年以降の手紙には、パウンドのあからさまな反ユダヤ主義が見られるようになる。するとウィリアムズはパウンドの『文化ガイド』(*Guide to Kulchur*, 1938)の書評を *The New Republic* 誌に「安物買いの銭失い」という英語の諺にかけた“Penny Wise, Pound Foolish”(229-30)というタイトルで発表し、パウンドの30年に及ぶ反ユダヤ主義を非難している。また、1940年4月6日付けのパウンド宛の手紙(SL 203)では次のように述べている。

おれはおまえのことをずっと弁護してきたけど、もうごめんだ。この数年間、おまえがやってきたことは反ユダヤ主義じゃなかった、などとよくおれに言えるな。おまえがそれを一番よく知っているじゃないか。そんなことは他の誰かに言ってやれよ。もし、おまえがこれまでのおれたちの友情のかけらをほんの少しでも大事にしたいと思うなら、そんな馬鹿なまねはやめてくれ。⁶⁾

そしてパウンドは、1941年から43年までのローマ放送でのラジオ演説⁷⁾によって国家反逆罪に問われ、その結果ワシントン DC にある精神病院、セント・エリザベス病院に12年間にわたって収容されることになる。

3

一方、ウィリアムズは、1946年に長篇詩「パターソン、第1巻」を発表する。そのなかでパウンドと自分の立場の違いを次のように述べている。

動けない

かれ(ドクター・パターソン)は、逃げた連中を

逃げ去ることのできた連中をうらやましがる
やつらが向かったのは周辺——
別の中心に向かって、脇目もくれず走り去った——
明晰さを求めて(もし
見つければの話だが)
 それに美と
この世の権威を求めていった——

Moveless
he envies the men that ran
and could run off
toward the peripheries —
to other centers, direct —
for clarity (if
they found it)
 loveliness and
authority in the world — (PA 35)

「逃げた連中」とは、ヨーロッパの文学伝統を求めてアメリカという土地を離れていったパウンドやエリオット、そしてH・D・といった同世代の詩人たちを暗示している。ここでいう「周辺」(“peripheries”)とはアメリカを中心としてとらえたヨーロッパのことだ。彼らが求めたものはアメリカには望むことができない権威だったといえるだろう。

次の2行は「第1巻」の終わりの部分に登場する。

- P. おまえの関心は役にも立たない泥だけれど、おれが求めているのは完璧な作品だ。
- I. 主導権は帝国へ変わり、帝国は傲慢を生み、その傲慢が破滅をもたらす。
- P. Your interest is in the bloody loam but what
I'm after is the finished product.
- I. Leadership passes into empire; empire begets in-

solence; insolence brings ruin. (PA 37)

P とは、エズラ・パウンド。I とはドクター・パターソン、すなわちウィリアムズをさすと考えてよい。「役にも立たない泥」とは、アメリカという国の文化的な不毛さを揶揄したメタファーとなっている。パウンドが *Hugh Selwyn Mauberley* (1920) の冒頭で嘆いていた「半ば野蛮な国」(“a half savage country”) のことだ (P&T 549)。「完璧な作品」とは、過去の巨匠、たとえばホメロス、ダンテ、孔子といった文化創造者の遺産を新たにすることで生み出されてきた彼の作品、おそらく、彼が生涯にわたって書き続けていた作品『詩篇』を意識して語った言葉である。パウンドの「主導権」ということについていえば、ウィリアムズは 1948 年にセント・エリザベス病院から送ったパウンドの手紙 (SL 254-55) を、ほとんど手を加えずに翌年の 1949 年に出版した「パターソン、第 3 巻」で使っている。

ともかく精神の糧とするために
おまえが読まなくてはいけない本は、(あの本は
除いて)間違えなく
100 冊はあるはず

ギリシャ悲劇は、古典対訳になっているロウブ文庫で
すべての巻を再読せよ。——それに、プロベニウス、それにゲセル
それにブルック・アダムズも
もしまだ全部読んでないなら
それからオウィディウスはゴールディング訳の
エヴリマンズ・ライブラリー版を読め。

そして、読書リストが欲しいなら
パパに聞きなさい——しかしリストに
あるからといって
あわてて読んじゃいかん
(アン・パサン)ついでに、これはフランス語。

Enny how there must be
one hundred books (not
that one) that you need to
read fer yr/ mind's sake.

re read *all* Gk tragedies in
Loeb. — plus Frobenius, plus Gesell.
plus Brooks Adams
ef you ain't him all. —
Then Golding's Ovid is in
Everyman's lib.

& nif you want a readin
list ask papa — but don't
go rushin to *read* a book
just cause it is mentioned
eng passing — is fraugs. (*PA* 138)

引用の前半の部分にある「あの本」とは、エリオットの詩劇『一族再会』についての言及である (*SL* 253-4)。それはさておき、この詩句で気になるのはパウンドの言う「精神」(the mind) の意味するところだ。これはパウンドとウィリアムズの詩に対する考え方の違いを理解するキー・ワードといえる。

4

ウィリアムズは1946年に、オーストラリアの詩の雑誌の編集者フレックスモアー・ハドソンから「芸術家として目指すものは何か、また現在のアメリカ詩の状況について書いていただきたい」という原稿の依頼を受けた。それにたいしてウィリアムズは、手紙というスタイルでパウンドの詩学と自分の立場について述べている。この“Letter to an Austrarian Editor”というエッセイは、1946年にアメリカのリトルマガジン *Briarcliff Quarterly* に発表され、その翌年オーストラリアの詩の雑誌 *Poetry* に掲載されたが、それ以後出版された

ウィリアムズのどの作品にも収録されなかったため、その存在はほとんど知られていなかったが、ウィリアムズの研究誌 *William Carlos Williams Review* に再録された。おそらくそれはウィリアムズ自身の他のどの詩論よりも明快なものとなっている。「オーストラリアの編集者への手紙」というタイトルから受ける印象とは異なり、まさにウィリアムズの詩論そのものといった内容になっている。

このエッセイからマインド「精神」というキー・ワードを考えてみたい。

わたしたちは何年も前に別の道を選んだのです。パウンドはヨーロッパで自分と同等の知識人たちのなかを渡り歩き、わたしはアメリカを離れることなく、自分の仕事の刺激をここで発見しようと苦しんでいます。もっとも、わたしにそれを書くことのできる才能があればの話ですが。エズラはあわてて外国へ旅立ちました。そのあと他の人たちが彼に続きましたが、それはいまの問題とは関係ありません。エズラは、精神を豊かにするのは精神であると思ひこみ、環境は取るに足らないもの、そして自我とは偉大なものであり、この世界ですべきこととは、いまでもそしてその当時もヨーロッパへ行くことであると考え、それを実行したのです。

エズラにとっての精神とは、いわば鳥のようなもので、この鳥は雌の鳥も、それどころか巣といったものもなしに、空中から生まれるのです。精神という鳥は、時代や場所を飛び越え、細胞分裂によって永遠不滅ではないにしろ、すくなくともエズラの場合は、グイード(・カヴァルカンティ)の肩からその全貌が現れたのです。これは太古の昔から古典の世界を支配してきた魅力的な考えであり、そこからエズラ・パウンドの初期の傑作が生まれたのです。(下線部筆者)⁸⁾

たしかにパウンドの初期の短い作品を集めた詩集 *Personae* (1909) は、過去の偉大な父権的文化伝統から作られていることは否定しがたい。「パウンドはその類い希な詩的才能によって過去についての研究を重ね、それを正しく認識してきたといえるでしょう。だからこそ、自分が理解していることがわかる作家はこの世にはいないと確信するようになったのです」⁹⁾ と、ウィリアムズは結論している。

先に引用した『パターソン』の読書リストもその一例といえよう。しかし、ここで注目したいことは、下線部が暗示しているようにこのパウンド的精神と

いうものが、父親から息子へと受け継がれる、母親不在の「単性生殖」的な世界から産みだされていることである。雌の鳥が不在の単性生殖は、雛を育てる巣という具体的な場所も必要としない、とウィリアムズは考えている。フェミニズム批評の洗礼を多かれ少なかれうけてきた私たちには、「ジェンダー」という視点からモダニズムの男性中心的な美学のアキレス腱を分析することはさほど目新しいことではないかもしれない。しかし、このエッセイが書かれたのは1946年、つまりいまから半世紀以上も昔のことで、「父権性」(patriarchy)という言葉が一般的に使われる前のことだ。パウンドは、「古典的」伝統によって、過去の天才(もちろんこの先輩たちとは男性をさす)やその精神によって、自分の精神を活性化してきた、とウィリアムズは考えている。この父権的権力構造は、はじめに普遍的・永久的な文化的形態を作り上げ、次にその形態のなかで、小さな革新をつくりだすことのできるごく一部の選ばれた個人的才能に「独創性」というお墨付きを与えることになる。そうすることでその権力構造は再生産されてゆく。そして文学伝統の権威はお墨付きをもらった世代から世代へ、「精神から精神」へと受け継がれる。政治的あるいは経済的権力構造の再生産もこれと同じプロセスだ。そしてまさにこれはパウンドが代表しているモダニズムの本質である。

もう少しウィリアムズの言葉を引いてみよう。

それゆえその不毛なスローガンの意味を逆転しなくてははいけません。「偉大な詩人を生むためには、偉大な聴衆も必要である」というのは、ずっとまえから間違って理解されていました。(過去の詩人であれ、これから現れる詩人であれ)偉大な詩人は、偉大な社会が産み出すのです。詩人があらゆる精神から生まれた肉であるように、その社会の政治的形態が詩人の肉なのです。

これまで集めてきた技の宝庫にたよって、しばらくは生きのびることはできるかもしれませんが、しかし、肉が補給されなかったら、仮に生きていたとしても、その人の肉は失われてしまうでしょう。社会とのつながりをしっかりと保つことができれば、創造を続けてゆくことはできるでしょう。もし、たわいもない夢をみている、女性的なものを与えてくれる社会との関係を絶てしまえば、その人の生命の源泉は枯れてしまうのです。パウンドの場合がそうだったように、結局のところ、文学においては生殖不能

な状態をもたらすのです。

すぐに悲惨な結果になるというわけではありません。わたしたちは堆肥の山から日々の糧を得て生きているのですが、その堆肥の山のひどい悪臭を嫌悪するあまり、現実から目をそむけ、しばしば学問的アプローチを選択してしまうのです。パウンドがそうであったように、こういった学問的アプローチは、過去の父親から父親へと受け継がれた素晴らしい形態へともどってゆくことになります。それは母親不在の伝統です。(下線部筆者)¹⁰⁾

学問的アプローチについては、わたし自身すこし耳が痛いところがあるが、それはさておき「女性的なものをあたえてくれる」(“supplying female”)という気になる表現がある。これはどういう意味なのだろうか。

ウィリアムズはこれまでたびたび、すべての芸術はそれが生まれる文化的・歴史的コンテクストから理解しなければならないと主張してきた。その典型は『アメリカ人氣質』にみることができる。ウィリアムズにとって「女性的なもの」とは、支配的文化によって略奪され、排除され、沈黙を強いられてきたあらゆるものを表象するメタファーである。パウンドと違ってウィリアムズは、自分自身が男性として、その女性的なものを奪ってきた側であることを自覚していた。ウィリアムズの長篇詩『パターソン』には、パウンドの他にも実際ウィリアムズに宛てられた手紙が引用されている。なかでも「クレスの手紙」として知られているマーシア・ナーディからの手紙¹¹⁾は、詩人ウィリアムズを糾弾するひとりの女性の声として、傷ついた女性性(feminine disgraced)のメタファーとしてテキストに織り込まれている。

ウィリアムズは、『パターソン』で、女性性を除外し、男性性だけの「単性生殖」(monogony)が作りだしてきたヨーロッパ、そしてアメリカの文化伝統に対して女性の声を織り込むことで戦いを挑んだといえるだろう。長篇詩のコンポジションについて、例えば神話的構成、イデオグラムの手法、そして歴史や手紙をテキストに織り込むことなどは、すべてパウンドの『詩篇』がそのヒントになっている。これは方法論の問題だ。

しかしウィリアムズはパウンドとは違って、パターソンという実在の地方都市を長篇詩のトポスとして選択し、ちょうどこのエッセイを書いた同じ時期に第1巻を発表した。「オーストラリアの編集者への手紙」と題されたこのエッセ

イは、長篇詩『パターソン』のデザインとして読むことができる。

5

パウンドの詩の特徴としてあげていた「雌の鳥も、それどころか巢といったものもなしに、空中から生まれる」精神とは対照的に、ウィリアムズは彼にとっての「巢」となる場所、パターソンを選択した。パターソンという名前は、1791年にパターソンに植民が行われたときのニュージャージー州の知事ウィリアム・パターソンに因んで付けられたものだが、ウィリアムズが Paterson という名前を Pater (すなわち father 父) から son (息子) への文化伝承を暗示するものとして意識的に使ったことは、この詩の主人公にドクター・パターソンという名をつけていることからもうかがえる。つまりウィリアムズは、アメリカに持ち込まれたヨーロッパの文化伝統と、その伝統によって略奪され、排除され、声を奪われてきたその土地の固有 (vernacular) の文化がぶつかり合うトボスとして、パターソンという具体的な都市を選択したのだ。地理的にみればパターソンは、ウィリアムズが生涯を過ごしたニュージャージー州ラザフォードの近くに位置していた。また、産科・小児科の医師としてウィリアムズは、産業都市パターソンに暮らす貧しい移民労働者にじかに触れ、その生活を熟知していた。それがこの町を長篇詩の舞台として選んだ大きな理由と考えられる。さらにもうひとつの理由は、ニュージャージー州パターソンという町が、アメリカにおける移民労働者の搾取の歴史が刻まれた場所に他ならなかったからだ。

ウィリアムズの長篇詩『パターソン』は、パウンド的な美の基準からみれば、「役に立たない泥」(“bloody roam”)の寄せ集めに見えたであろう。実際、パウンドの『詩篇』と比べながら読んでみると、私自身なにか物足りなさを感じていたことも事実だ。おそらくその理由は、『詩篇』に見られるような詩人を導く、いわば守護神や理想のヴィジョンが欠けているためであろう。都市とそれを取り囲む自然、男と女、土地と言語といった対立関係のなかで、右往左往し翻弄されながら、この対立を和解させる新しい詩の言語、フォームを求めながらもそれを発見できないドクター・パターソンの姿に、私たち読者はいらだちをおぼえるからかもしれない。しかし、ドクター・パターソンのいらだちの原因は、「精神から精神へ」受け継がれ、自明なことでされてきた文化・歴史・社

会そのものを脱自然化してゆくことの難しさにあると解釈することもできよう。

ウィリアムズはパウンドが言う「完成品」を意図していたとは考えにくい。しかし『パターソン』を「ジェンダー」という視点から考えてみると、ウィリアムズの意図ははっきりしてくる。「精神から精神へ」と受け継がれることで強化されてゆく権威、これは男性詩人ウィリアム・カーロス・ウィリアムズもその例外ではなかったはずだ。当時のアメリカを支配していた政治的・文化的・経済的圧力によって隠蔽されてきた「女性的なもの」を、現実の声として詩のなかに持ち込むことがウィリアムズの狙いであった。この「女性的なもの」をポスト・コロニアル、あるいはマルチ・カルチュアルな視点として解釈することもできるだろう。

ウィリアムズの『パターソン』をパウンドの『詩篇』の合わせ鏡として使ってみると、二つのモダニズムの本質が見えてくる。イマジズムから始まった20世紀の新しい詩の運動が、パウンド、エリオットに代表される「精神から精神へ」という伝統主義と、ウィリアムズのモットー「事物をはなれて思想はない」“No ideas but in things” (PA 6) にみられるような「ここそしていま」の現実主義に分化していったことは周知のとおりである。T・S・エリオットが『荒地』を出版した翌年の1923年に、ウィリアムズは『春のいろいろ』を発表していることは注目に値する。最初この詩集に収められ、後に「赤い手押し車」(“The Red Wheelbarrow”)¹²⁾ というタイトルがつけられた詩で、ウィリアムズは言葉のもつ象徴性を可能なかぎり削り取り、詩そのものをオブジェとするような、それまで英米詩にはみられなかった詩を創造していった。そしてそこからヨーロッパの文学伝統とは違ったアメリカ詩の多様性が生まれてきたのである。

注

- 1) この本は、後にシティ・ライツから「ポケット・ポエツ・シリーズ」の1冊として再版されるが、1920年版のプロローグは削除されている。シティ・ライツ版で削除されたプロローグは、*Selected Essays* 3-26 と *Imaginations* 6-28 で読むことができる。
- 2) もとの手紙は *Selected Letters* 30-32 を参照。
- 3) [...] And American? What the h—l I do you a blooming foreigner know about the place. Your *pere* only penetrated the edge, and you've never been west of Upper Darby, or the Maunchunk switchback.

Would H., with the swirl of the prairie wind in her underwear, or the Virile Sandburg recognize you, an effete easterner as a REAL American? IINCONCEIVABLE!!!!

My dear boy you have never felt the woop of the PEEreries. You have never seen the projecting and protuberant Mts. of the SIerra Nevada. WOT can you know of the country?

You have the native credulity of a Co. Clare emigrant. But I (*der grosse Ich*) have the virus, the bacillus of the land in my blood, for nearly three bleating centuries. (Bloody snob. “evave a brick at’ im!!!)...

- 4) Si le cosmopolitisme littéraire gagnait encore et qu’il réussit à éteindre ce que les différences de race ont allumé de haine de sang parmi les hommes, j’y verrais un gain pour la civilisation et pour l’humanité tout entière....

“L’amour excessif d’une partie a pour imm-diat corollaire l’horreur des parties étrangères. Non seulement on craint de quitter la jupe de sa maman, d’aller voir comment vivent les autres hommes, de se mêler à leur luttes, de partager luers travaux, non seulement on reste chez soi, mais on finit par fermer sa porte. [...]” Williams, “Prologue to Kora in Hell,” Selected Essays 8–9. Cf. *Selected Letters* 30–32.

- 5) 「ソーシャル・クレジット」について、ワイトマイアーはつぎのように説明をしている。

Social Credit was a halfway house between capitalism and socialism. First propounded in 1919–20 by an English engineer named C. H. Douglas, Social Credit located the economic flaws of modern industrial society not in production but in distribution. Something was preventing consumers from acquiring the food, clothing, housing, and other goods and services that they needed and that modern technology could provide. Douglas attribute maldistribution to the discrepancy between prices and purchasing power brought about by excessive bank interest charges, or usury. This imbalance, he argued, leads to domestic poverty and eventually, through competition for overseas markets, to international wars. Douglas proposed to nationalize credit banking and to operate it in the rest the economy. He also advocated price controls and direct consumer subsidies from the national treasury, which called National Dividends. (*SE* 123)

- 6) [...] I’ve defended you till I’m sick of it. Why, for instance, try to tell me that your whole initiative hasn’t been anti-semitic of recent years? You know damned well it has been so. Tell somebody else such things but don’t try it on me if you value the least vestige of what we used to treasure between us. (*SL* 203)

- 7) このラジオ演説の内容については、*Ezra Pound Speaking* を参照。

- 8) We parted years ago, he to move among his intellectual equals in Europe, I to

remain at home and struggle to discover here the impetus to my achievements, if I found myself able to write anything at all. Ezra in his rush to get abroad was followed by others but that's of no present matter. He left the States under the assumption that it was mind that fertilizes mind, that the mere environment is just putty and that -assuming one's self great thing to do in this world is, or was then, to go to Europe, which he did. (*WCW Review* 8)

- 9) Having more or less carefully studied and appreciated the past, and with rare perception, he [Pound] thoroughly believes that no writer on earth knows what he knows. (*WCW Review* 9)
- 10) Therefore you must reverse the sense of the sterile slogan: "To have great poets we must have great audiences too," long since discovered to be misleading here. Great poets (past and to be) are the *products* of great societies, whose political forms are their meat as they are meat of all minds.

A man may live for a time gathered hoard of skills, granted, but if he live his meat will run out unless replenished about him. He will continue to produce only if his attachments to society continue adequate. If a man in his fatuous dreams cuts himself off from that supplying female, he dries up his sources-as Pound did in the end heading straight for literary sterility.

The effect is not immediately disastrous. The scholarly thing (adopted frequency out of disgust for the raw odors and other aspects of the manure heap-we live out of manure heaps) is to do as Pound did, strike back toward the triumphant forms of the past, father to father. No mother necessary. (*WCW Review* 11-12)

- 11) ウィリアムズとその女性の書簡集 O'neil, Elizabeth Murrie, ed. *The Last Word: Letters between Marcia Nardi and William Carlos Williams*. Iowa: U of Iowa P. 1994. および, 小泉由美子 『『バターソン』, クレスレーターの意味』, 『現代詩手帖』 2 月号(特集 W・C・ウィリアムズ特集) 1995 年, を参照。
- 12) 初めて発表された *Spring and All* では, "XII" の数字だけで "The Red Wheelbarrow" というタイトルはなかった (Litz & MacGowan 224)。このタイトルが付いたのは, ルイ・ズコフスキーによってまとめられた *Collected Poems: 1921-1931* が最初である。

Work Cited

- Allen, Donald, ed. *The New American Poetry*. New York: Grove Press, 1960.
- Doob, Leonard W., ed. "Ezra Pound Speaking": *Radio Speeches of World War II*. Connecticut: Greenwood P, 1978.
- Eliot, T. S. *Collected Poems: 1909-1962*. London: Faber & Faber, 1963.
- O'Neil, Elizabeth Murrie, ed. *The Last Word: Letters between Marcia Nardi and William Carlos Williams*. Iowa: U of Iowa P, 1994.

- Pound, Ezra. *The Cantos*. New York New Directions, 1995
- . “Dr. Williams’s Position,” *The Dial*, vol. 85.5 (Nov. 1928): 395–404. Rpt. in *Literary Essays of Ezra Pound*. Ed. T. S. Eliot. London: Faber & Faber, 1954. 389–98.
- . *Ezra Pound: Poems and Translations*. New York: The library of America, 2003.
- . *Guide to Kulchur*. London: Faber & Faber, 1938.
- Williams, Carlos William. *The Autobiography of William Carlos Williams*. 1951. Rpt. New York: New Directions, 1967.
- . *Collected Poems: 1921–1931*. Pref. Wallace Stevens. New York: The Objectivist P., 1934
- . *The Collected Poems of William Carlos Williams* Vol. I: 1909–1939. Ed. A Walton Litz and Christopher MacGowan. New York: New Directions, 1986.
- . *Imaginations*. Ed. Webster Schott. New York: New Directions, 1970.
- . *In the American Grain*. 1925. New York New Directions, 1966.
- . *I Wanted to Write a Poem: The Autobiography of Works of a Poet*. Rpt. and ed. Edith Heal. 1958. New Directions, 1978.
- . “Letter to an Australian Editor.” *Briarcliff Quarterly* 3. 2 (1946): 205–8. Rpt. In *William Carlos Williams Review* 17. 2 (Fall 1991): 8–12.
- . *Paterson*. Rev. ed. Christopher MacGowan. New York: New Directions, 1992.
- . “Penny Wise, Pound Foolish.” *The New Republic* 99 (June 28, 1939).
- . “Prologue to Kora in Hell.” *Selected Essays*. New York: Random House, 1954. 3–26. Rpt. of “Prologue.” *Kora in Hell: Improvisations*. 1920
- Witemeyer, Hugh, ed. *Pound | Williams: Selected Letters of Ezra Pound and William Carlos Williams*. New York: New Directions, 1996.
- 小泉由美子 『『パターソン』、クレスレターの意味』、『現代詩手帖』2月号(特集 W・C・ウィリアムズ特集) 1995 年。

Two Aspects of Modernism in American Poetry
——What William Carlos Williams finds
in the poetics of Ezra Pound

Shigeyoshi HARA

Williams first met Ezra Pound at the University of Pennsylvania in 1902. Williams was a nineteen-year-old freshman student of medicine and Pound was a sophomore student of Romance languages. Their friendship lasted through a large amount of correspondence until Williams' death in 1963. Williams wrote in his *Autobiography*: "Before meeting Ezra Pound is like B.C. and A.D." Although Williams almost spent his life in America, Pound lived his expatriate life in foreign countries. There remains 535 letters between them, by which Pound helped keep Williams in touch with the avant-garde movements he might have enjoyed in Europe.

Selected Letters of Ezra Pound and William Carlos Williams (1996) shows an unpredictable friendship of collaboration and conflict. The correspondence not only carries arguments concerning their individual works but also implies two kinds of Modernism they created in American poetry. These two poets used passages from each others' letters in their works. As material for poetry, Williams particularly excerpted letters from Pound attacking himself, Williams, in Paterson.

Introducing Williams' uncollected essay "Letter to an Australian Editor" (1946) which clearly illuminates his poetics, this paper examines what Williams finds in Pound's mind which "is a sort of bird bred of air without female or in fact nest of any sort."